

創刊のことば

ここに愛知県美術館の研究紀要第一号が刊行されることになったのを慶びたいと思う。

学芸員の研究や調査の成果は、常日頃の美術館活動や企画展の開催に反映されているとはいへ、ただその範囲内におさまるわけではないし、またそこだけにとどまるべきではなからう。たとえば、親しく接することのできる所蔵作品とそれに関連する作品の調査研究は学芸員の仕事の重要な一環であり、不断に続けられていかねばならないし、また、担当した展覧会の実現によりやく漕ぎ着けた後のゆとりのなかで、展示された作品群をつぶさに見てゆくとき、当の展覧会の構成などについて反省を促されたり、それまでは気付かなかった新たな発見もあるであらう。あるいは、直接に展覧会企画に結びつかなくとも、各人が温めている研究テーマもあるはずである。美術館が研究機関としての性格を持つ限り、こうした活動や研鑽から得られた知見や考察を論文や調査報告として公表してゆくことも学芸員の努めでなければならぬ。

とはいへ、日々種々雑多な業務に追いまくられているのが日本の美術館学芸員の実態であり、必要な調査を進め、関係文献を渉獵して論文などにまとめる余裕を見出すのは決して容易なことではない。ことに、一昨年秋の開館以来、当館は直ちに対応を迫られる多くの課題に絶えず直面してきた。そうしたなかで、学芸員の多くは論考をまとめる努力を忘れなかったが、予定期日までに三人が脱稿し得た。彼らの労を多としたい。

栗田秀法君は、グスタフ・クリムトの代表作の一つ《人生は戦いなり（黄金の騎士）》の購入に際して収集委員会のための詳細な調書の作成を担当したが、そのときに調べたことを土台として、この作品に反映されているクリムトの芸術思想の変化を、当時のウィーンの精神文化の動きと関連させて論考をまとめた。寺門臨太郎君は昨年四月に開催された「パウル・クレーの芸術」展を担当した一人で、同展の図録にパウル・クレーの絵画がどのように日本に受容されたかについて興味深い研究を載せたが、その後さらに調査を進めて、新たな知見を加えたのが今回の論文である。所蔵作品や展示室に並ぶ作品を保存科学の観点から注意深く見守り、かつ適宜対応し続けている長屋菜津子さんは、当館の保存対策がどのように行われているかをまとめてくれた。今後新設される美術館のみならず、既存の施設にとっても参考となる事柄も少なくないはずである。

今後この研究紀要に学芸員各自の関心のあるテーマによる論文や報告が発表されていくことになる。多くの方からご批判なりご意見をいただければ幸いである。

一九九四年三月

愛知県美術館長

浅野 徹